２６．３．１７
杉並区広報課

視覚特別支援学校の子どもたちへ、手作りのさわる絵本を送り続けて３２年。荻窪で活動する小さなグループです。

荻窪地域区民センター（荻窪２－３４－２０）を活動拠点にしている「菜の花会」は、「目の不自由な子どもたちも感性豊かに育ってほしい」との願いから、１９８２年より３０年以上にわたり、さわる絵本やカレンダーを作って、筑波大学付属視覚特別支援学校に寄贈を続けている小さなグループです。
４月の新学期に向けて、カレンダー作りの大詰め作業中です！

「菜の花会」は、３０年ほど前に区が行った「さわる絵本作り」の講習を受けた受講生が、グループを立ち上げて始まりました。この間、引っ越しや介護、病気などでメンバーが変わりながらも、荻窪地域に住む６０～７０代の女性を中心に、現在も１０人のメンバーで毎月２回の活動を続けています。

絵本やカレンダーなどの作品は、視覚障害のある子どもたちが触って感じ取ることができるように、布や毛糸、フェルト、綿などを使って、立体的なさし絵を作り、点字と拡大文字を添えて仕上げます。型作りや縫いつけ、色塗りなど、メンバーが得意分野を分担して作業し、２０ページほどの絵本ができあがるまでに、約３か月かかります。出来上がった作品は、筑波大学付属視覚特別支援学校（文京区目白台 3-27-6）に寄贈し、子どもたちの授業などに役立ててもらいます。これまでに１０８作品を寄贈してきました。

作品を作る際は、できるだけ実物に近い感触や形を再現しようと工夫を凝らします。４月のカレンダーは、「わらび・しらす」の言葉遊びにさし絵を添えます。乾くと透明になるボンドで透明感のあるしらすを作ったり、わらびは毛糸で作った柔らかな先端の新芽がさわれるように、茎の部分だけ台紙に縫い付けたりしています。以前、砂浜を表現するのに、質感が似ていた紙やすりを使ったところ、子どもたちがケガをするから駄目だと教えられた苦い経験もあり、今はリアリティだけでなく、細部まで安全性にこだわります。

初期から活動に参加している大嶽典子（おおたけのりこ）さんは、「何度も、もう駄目かなと思いながら、ひとつの作品ができあがる喜びや子ども達が楽しそうに本を使う様子が励みになり、続けてこられました。作品は触って楽しんでもらいたいので、たくさん触って壊れてしまったから、直してほしいといわれるのが一番です。」と笑顔で話します。

４月の新学期には、菜の花会の作ったカレンダーが、学校の廊下を明るく飾ります。

【問い合わせ先】
総務部広報課　電話３３１２－２１１１（代表）